

狙撃手の無念

余顕斌

(訳 萩田麗子・横田勤)

それは一丁の古い銃であった。古いが、決して廃棄処分されるものではなく、それどころか、その命中率は極めて高く、百発百中なのである。

なぜならば、それは一人の有名な狙撃手の手に握られていたからだ。

この狙撃手は、狼と同じ眼力、蛇のような素早さ、獅子のような判断力を持っている。彼は草むらの中で横になっているとき微動だにせず、風が吹き抜ける原野では、ただ草だけが起伏し揺れており、野うさぎが野原を走り過ぎている。

狙撃手は潜伏している豹の如く、二つの輝く目はピクリとも動かず遠くをながめながら、獲物を待っている。彼が撃つ一つ一つの弾は、かつて世界を震撼させた。

彼はかつて、壊れた窓の前から、体中に勲章をいっぱい付けた将軍を射殺した。そのとき将軍は馬に乗っていた。車両隊は銅鑼や太鼓の音を空まで響かせながら進み、一列に並んだ兵隊たちが前を進んで道を開け、左右には護衛兵が警戒体制を取っていた。

将軍は満面に笑みを浮かべ、手を振って挨拶していた。

「パン」と一発の銃声が響き、将軍は頭から馬の下に落ちたが、狙撃手は幽霊のように姿を消した。

それからほどなくして、彼はまた敵の分遣隊の司令官を殺した。彼は戦略を立てるのに長けた英雄であった。

その日、分遣隊の司令官は参謀の一团を引き連れ、剣をぶら下げ、戦場を視察していた。行くさきざきで兵士は次から次へと手を上げて敬礼をした。彼はうなずきながら通り過ぎた。望遠鏡を持っていて、気ままに遠方を眺めていた。いささかも、一丁の古い銃が自分に狙いを定めているなどとは考えていなかった。

一発の乾いた銃声が、静かな空を鋭く切り裂いた。

分遣隊の司令官は倒れた。その目には無限の驚きと恐れが満ちていた。死の淵にあって、彼はだれかが大胆にも激戦の最中に自分を狙って殺すということを想像だにしていなかっただろう。

ひとしきりの混乱が起こったが、狙撃手はその古い銃を引きずりながら待ち伏せ地点から消え去っていた。

この古い銃は、この戦争中、今までに99人の将校を狙撃して殺した。すべてが指揮官で、歴史に記載されるであろう人物たちであった。

狙撃手は、自分は歴史上に名を残すであろう、古い銃は名銃となり、自分は射撃王となり、すべての狙撃手が仰ぎ見る偉大な業績となるだろう、ということがわかっていた。

これはもちろん、狙撃手が99名の有名な人物を狙撃して殺したからだけではない。

狙撃手はこう考えていた。彼らは彼の狙撃人生における一皿のおかずであり、彼の銃に狙われた一匹のウサギのようなものであり、最高峰に達する前の一つの小さな通過点にあるものに過ぎない。

彼にとってのごちそうが出るのは今日である。

彼の銃の的となる「百獣の王」が、今日この道を通るのだ。

彼の人生も今日の一発で最高峰に達し、追い付ける者はいないだろう。

確実な情報が伝わってきていた。今日敵国の元帥が、前方の作戦部隊を指揮するためここを通るといふのだ。

敵国の人民の英雄を狙撃するため、敵国の軍人の精神的支えを取り除くため、彼はここですでに三日三晩待ち伏せしていた。

今日の一発で、戦争は終結するだろう。

彼は想像した。そのときになると自分はこの古い銃を担いで国に帰り、銃は名銃となり、軍事博物館に入るだろう。自分は英雄となり、至るところで講演をしたり、いろいろな所を観光し、あちこちで美女に抱擁されキスされるだろう。

目の前にあるのは一本の荒れ果てた道路で、この三日間、ウサギ以外には誰ひとり通らなかった。

彼はあせらなかつた。彼は有名な狙撃手であり、その意志は鉄の如く、その気力は鋼の如くであった。彼は知っていた。このような時にこそ狙撃手の忍耐力と素質が試され、重要さが増してくるのである。

彼は望遠鏡を持って、遠くの所を眺めていた。遠い所を鳥が何羽か飛び回っていて、陽光が草の先端を跳び跳ねていた。

一切が太古の時代のように静かであった。

突然、彼はぶるっと体を震わせた。

穂波の先に二つの黒い点がちらりと揺れ動いたのである。狙撃手は第六感を頼りに、「その人物だ」と思った。

ここに無関係な者は来ない。来たのは敵国の元帥に違いない。

狙撃手は体を伏せて隠れ、細心に銃を検査し、それから弾を込め、銃をそっと伸ばした。二つの黒点はだんだん近づいて来て、はっきりと顔を見ることができるようになった。

狙撃手は必死に前を注視していたが、その顔には失望の表情がますます濃くなっていった。やって来た人間は勲章も付けていないし肩章も付けていなかった。前のほうにいるのは老人で、髪の毛は草のように揺れ動いている。後ろには少年がいた。

二人の着ているものは軍服というよりは、こじきの服と言ってもいいほどのボロボロのものだった。

少年が突然転んだ。前に行く老人は振り返り、少年を助け起こし、まるで彼の祖父であるかのように、少年の体の土をはたき落とし、少年が肩に担いでいる銃を自分の肩に乗せた。

老人が振り返った時、狙撃手には、照準器を通して、慈悲深い、皺が刻まれた老人の顔がはっきり見えた。

いま入隊したばかりの、実直な農民だと推測し、狙撃手は失望した。

狙撃手は銃を片付けた。「名銃、無名の者など殺さず」である。

二人は遠くへ行った。狙撃手は再び古い銃を抱え、草むらに寝転び、敵国の元帥が通り過ぎるのを静かに待った。空は暗くなってきたが、依然として人影は見えなかった。

二日目、狙撃手が待ちつづけようとしていたとき、知らせ受け取った。「敵国の元帥はすでに前方に到着して、まさに戦闘の指揮を取っているところである。狙撃手にすぐに殺させよ」というものである。狙撃手はこの命令を受け取り、あわてて古い銃を抱え、いぶかしく思いながら陣地の最前方に位置した。

一人の老人が敵軍も進攻の指揮を取っているのが見えた。

その人物を彼は知っている。まさしく昨日、彼の古い銃のもとを通り抜けたあの農夫である。

彼はためらった。依然として信じられない。

「早く！ 彼だ、あの有名な元帥だ！」そばにいた戦友が声をかけて気付かせた。

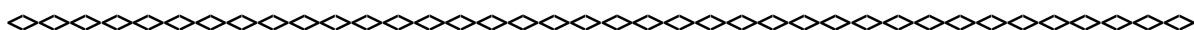
彼は一瞬驚いて銃を上げた。だが、引き金を引かないうちに、向こうから乾いた銃声が伝わってきて、彼はちょっと体をぐらっとさせて倒れた。

相手方の狙撃手に気付かれたのだ。

死を前にして、彼は古い銃を抱きながら、そばにいた狙撃手に一言、命と引き換えにした狙撃に関する箴言を与えた。

「如何なる優れた狙撃手も、永遠の美德を狙撃することはできぬ」

(『中国微型小説排行榜 2012 年』百花洲文芸出版社, 南昌市, 2013, pp. 114-117)



(中国語原文)

狙撃手の遺憾

余显斌

这是一杆老枪。老，但并不等于已经报废，相反，它的命中率极高，百发百中。

因为它被握在一个著名狙击手的手中。

这个狙击手有着狼一样的眼光，蛇一样的灵动，狮子一样的辨别力。他卧在草丛中，一动不动，风吹过原野，只有草在起伏摇动，只有野兔从原野上跑过。

狙击手如一只潜伏的豹子，一双亮亮的眼睛，一动不动地望着远方，等待着猎物。他的每一颗子弹都曾让世界为之一抖。

他曾在一扇破窗前射杀了一位身上挂满勋章的将军。当时，将军骑着马，车队锣鼓喧天，一队列兵当前开路，左右警卫荷枪实弹。

将军满面微笑，招手致意。

“啪”的一声枪响，将军一个倒栽葱掉在马上，狙击手却如鬼魅一般，了无踪影。

不久，他又狙杀了敌人的支队司令，一位足智多谋的英雄。那天，支队司令带着一群参谋，挎剑佩枪，视察战场，所到之处，士兵纷纷举手行礼。

那天，支队司令带着一群参谋，挎剑佩枪，视察战场，所到之处，士兵纷纷举手行礼。支队司令颌首走过，拿起望远镜，挥洒自如地向远方望去。他丝毫没意料想到，一支老枪对准了他。

一声清脆的枪响，划破了庄严的天空。

支队司令倒下，眼中是无限的惊骇，至死他大概也不相信，有人竟敢在千军万马中狙杀自己。

在一阵混乱中，狙击手拖着那支老枪消失在埋伏地点。

到现在，在这场战争中，老枪已经狙杀了 99 个军官，而且每一个都是独当一面的人，都是将被载入史册的人。

狙击手知道，自己也将被载入史册，让老枪成为一代名枪，让自己成为一代枪王，成为所有狙击手仰望的一座丰碑。

这当然不是因为狙击手狙杀了 99 位著名人物。

狙击手认为，他们只是他狙击生涯的一碟碟小菜，是老枪下一只只兔子，是达到顶峰前的一点小小的点缀。

他的大餐就在今天。

老枪枪口下射击的百兽之王，将在今天从这路上经过。

他人生的顶峰也会因今天一枪达到巅峰，无人可及。

因为有情报显示，今天敌国的统帅将从这儿经过，去指挥前方的作战部队。

为了狙击那位敌国百姓心目中的英雄，为了铲除敌国军人的精神支柱，他在这儿已经埋伏了三天三夜。

今天一枪，将会结束战争。

他想，到时自己就会扛着这支老枪回国，老枪成为名枪，进入军事博物馆；自己将会成为一位英雄，到处演讲，到处观光，到处得到美女的拥抱和亲吻。

眼前是一条荒僻的路，三天来，除了兔子，没一个人经过。

他不急，他是有名的狙击手，意志如铁，毅力如钢。他知道，越是这个时候，越是能考验出一个狙击手的耐力和素质，也越是最关键的时刻。

他拿起望远镜，向远处望去。远处，有几只鸟儿飞来飞去，阳光在草尖

上跳跃。

一切静如洪荒。

突然，他身子一抖。

在草际浪尖，闪动着两个黑点，狙击手凭第六感觉知道，那是人。

在这儿，没有闲人，来的一定是敌国统帅。

狙击手埋伏下身子，细心地检查了一遍枪，然后，装好子弹，将枪悄悄伸了出去。那两个黑点越来越近，已经能看清脸面了。

狙击手眼睛死盯着前面，脸上失望的神色越来越浓重：来的人没有挂勋章，甚至没有肩章。前面是个糟老头子，头发摇曳如草；后面是个半大孩子。

两个穿的与其说是军装，不如说是叫花子衣服，破烂不堪。

那个半大孩子突然摔了一跤，前面的糟老头子转身，扶起孩子，如一个祖父一般拍掉他身上的土，接下他肩上的枪，扛在自己肩上。老头回过头时，狙击手通过准星清楚地看到，那是一张慈善而皱纹堆垒的脸。

一个才入伍的老实巴交的农民，狙击手失望地猜测。

狙击手收起枪：名枪之下，不死无名之辈。

那两个人走远了。狙击手又一次拿起老枪，卧在草丛中，静静地等着，等待着敌国统帅经过。但是，天慢慢黑下来，仍不见一个人影。

第二天，狙击手准备继续等待，这时，他接到通知，敌军统帅已到前方，正在指挥战斗，让狙击手赶快狙杀。狙击手接到命令，匆匆带着老枪，还有一系列的疑问，到了前沿。

一个老头子正在那儿指挥敌军进攻。

那人，他认识，就是昨天在他的老枪下走过的那个老农夫。

他迟疑了一下，仍有点不信。

“快！就是他，那位大名鼎鼎的统帅！”旁边的战友提醒道。

他一惊，举起枪，还没有扣动扳机，对面传来一声清脆的枪响，他晃了晃，倒了下去。

他被对方的狙击手发现了。

临死前，他抱着老枪，对旁边的狙击手传授了一句以生命换来的狙击箴言：“任何高明的狙击手，也永远狙击不了美德！”

□□□□□